# フルンボイル調査報告

二　木　博　史

昨年（2015年）の8月にフルンボイルを再訪した。前回の訪問は2002年8月なので、まる13年ぶりである。前回は、トヨタ財団の助成によるプロジェクト「満洲国・蒙疆政権時代の内モンゴルに対する日本の啓蒙政策と内モンゴル人の対応」によるものでおもに満洲国時代の教育と出版についてききとり調査をしたが、今回は科学研究費プロジェクト「モンゴルにおける境界と越境の歴史」のための調査であった。

この科研費プロジェクトは、先行する課題「モンゴルにおける景観認識の歴史―古地図の研究」（2009-2011年度）「モンゴルにおける地図の作成とガバナンス」（2012-2014年度）につづくもので、地図研究の成果を援用しつつ、国や地域の境界をこえて移動したモンゴル系の集団・個人の歴史を研究しようという目的を有し、具体的には研究分担者の上村明氏はモンゴル西部のアルタイ・オリアンハイの移動について、わたしは東部のバルガ人の越境についてしらべることになっている。

バルガ人の越境についてのわたしの関心は、ハルハ河戦争（ノモンハン事件）の要因に関する議論とも関係している。周知のように、同戦争はモンゴル人民共和国と満洲国のあいだの国境紛争に端を発しており、おもな戦場になったのは、ハルハとフルンボイルの境界の地域であり、バルガ人が居住する空間である。

バルガ人の移動について研究したモンゴルの研究者G.ミャグマルサンボー氏（現在は科学アカデミー歴史研究所所属）によれば、20世紀にバルガ人は、3度の大規模なフルンボイルからモンゴルへの移動・移住をおこなった[1]。最初は1915-16年、2度めは1928年、3度めは1945年である。最後の移動が比較的よくしられているのは、かれらのためにドルノド県（アイマグ）にフルンボイル郡（ソム）がつくられたこと、移動を主導した旧満洲国軍大佐シャーリーボーさん（1909-2009）がモンゴル国立大学で日本語とマンジュ語をおしえていて、日本人とも交流があったためである[2]。

今回のフルンボイルゆきが実現したもうひとつの理由は、第3回トゥングース諸語・トゥングース文化国際会議（*The Third International Conference on Tungus Languages and Tungus Culture*）への招待であった。中国社会科学院民族文学研究所の共産党委員会書記で国会議

---

1　G.Myagmarsambuu, *Bargyn erkh chölöönii temtsel: Nüüdel, suudal,* 2nd ed., Ulaanbaatar, 2011, p.3.

2　シャーリーボーについては、吉田順一「ヤー・シャーリーボー氏の経歴」『日本とモンゴル』99号、1999年を参照。

員のチョク（朝克）さん（エウェンキ人）から同学会にさそわれた。この会議の漢語のタイトルが、「第三届满通古斯学与通古斯一带一路国际研讨会」となっているのは、現政権に対する配慮であろう。学会出席と現地調査がいっしょにできるなら、この機会をのがすてはないとかんがえ、出張することにした。

2015年8月4日（火）の夜、北京経由で飛行機でハイラルに到着した。飛行時間は約2時間である。内モンゴル大学のナヒヤさんの紹介で、フルンボイル学院のセレンバト教授がでむかえてくれた。実は、前回はナヒヤさんのおとうさんの、高名な内モンゴル近現代文学研究者ウ・ショガル先生が同行してくれた。ショガルさんは、新バルガ左旗出身の名士なので、さまざまな便宜をはかっていただいたことをおもいだす。このときは、現在は桜美林大学のバイカルさんと奥さんのナブチさん、現新潟大学の広川佐保さんが同行した。

2機が同時に到着し、ふだんあまりつかわれないゲル式のたてものが出口としてつかわれたため、セレンバトさんが出口を勘ちがいしたせいで、合流するのにかなり時間がかかった。セレンバト教授は、エウェンキ人で、他のおおくのエウェンキ人同様、モンゴル語も母語同様に流ちょうにはなす。前回フルンボイル学院を訪問したときにおめにかかっているし、そのごもどこかの会議であいさつをしたことがある。

空港からハイラルのまちにはいる道路はくだりざかになっているため、くるまのなかから、まちをみおろすようなかたちになる。夜景がなかなかうつくしい。フルンボイル学院が経営する書香賓館にとまる。

セレンバトさんには事前に、フルンボイルからモンゴルへ移住したひとたちについてしらべたい、とつたえてあった。翌8月5日（水）、3人のひとにあってはなしをきくことができた。

午前中にホテルであったのはゴンビーン・ドガルジャブ氏である。わたしはおぼえていなかったが、13年まえにもおめにかかっているという。じつは、この日にはなしをきいた3人（G.ドガルジャブ、ツェヴェルマー、ポンツァグワンジル）は全員、前回もあったことがあるひとたちで、先方はそのことをよくおぼえていたが、わたしのほうは記憶がないという、なんともはずかしい事態の連続だった。

バルガには有名なドガルジャブが3人いて、ひとりはこのゴンビーン・ドガルジャブ、もうひとりはこの日の昼食をともにしたチョー・ドガルジャブ、3人めは言語学者服部四郎の協力者だったホアサイ・ドガルジャブ（故人）である。最後のホアサイ・ドガルジャブは特に重要で、戦後の数年間、モンゴルの党学校に留学したこともある。官僚として出世したほか、フルンボイルにおけるバルガ研究の基礎をきずく仕事もしている。このホアサイ・ドガルジャブ氏には、前回の訪問時にインタビューをしている。わたしはよくおぼえてい

ないが、同席したひとのはなしによると、わたしと同氏のやりとりは、ときにかなりはげしいものだったという。たぶん、公式的なこたえしかきけなくて、わたしがすこしいらだったせいだとおもう。

さて最初のG.ドガルジャブのはなしにもどるが、前回の調査のノートをみると、当時の同氏のかたがきは、フルンボイル学院の党委員会（副）書記だった。わたしは、かたがきから判断して、満洲国時代のことについてくわしいはなしをきくのは無理とかんがえ、つっこんだ質問をしなかったように記憶している。すでに9年まえに退職して年金生活にはいっているということもあり、今回は率直にバルガとモンゴルの関係についてかたってくれた。同氏は、むかしの行政単位では鑲白旗（ガルバル）の出身で、まさに1945年にモンゴルに集団移住した地域のひとである。シャーリーボー氏は同旗の約3分の2である250戸をモンゴルにつれていったという説明であった。また満洲国時代に軍に勤務したものはモンゴルに連行され、最初は政治教育をうけ、そのご収容所生活をおくったという。G.ドガルジャブさんのちちおやも、このようなひとりで、バヤントゥメン（現在のチョイバルサン）で病気でまもなくなくなったが、それをしらされたのは50年代になってからだという。くわしいいきさつはわからないが、ははおやもモンゴルに移住し、1993年に当地でなくなった。1946年うまれのG.ドガルジャブさんは、両親とはほとんど一緒にくらしたことがないということになる。モンゴルのドルノド県のフルンボイル郡の現在の郡長は、ちかい親族だそうだ。

G.ドガルジャブさん

ポンツァグワンジルさんと筆者

昼食のときにおあいしたチョー・ドガルジャブ氏は初対面で、政治協商会議の議長などを歴任した有力者である。バルガ人のモンゴルへの移住についてしらべているといったら、即座にバルガ人が1917年、1928年、1945年の3回、大規模な移動をしたという説明をはじめた。うえでミャグマルサンボー氏の記述を紹介したが、同氏はこのチョー・ドガルジャ

ブ氏らフルンボイルの研究者の研究成果にも依拠しているのに相違ない。

午後はセレンバト先生のくるまで新（シネ）バルガ左旗の中心地アムガランへ移動した。内モンゴル師範大学の文学研究者・詩人のチョルモンさんも同行した。ツェヴェルマーさん（1938年うまれ）という、ながいあいだ中学の先生をつとめ、文学作品も発表している老婦人のいえを訪問した。うえでもかいたように、おあいするのは2度めである。わたしのなまえまでおぼえていてくださり、恐縮したが、わたしのほうで記憶が欠落しているのは、1945年当時7歳だったということもあり、満洲国時代の教育や出版についてほとんど情報をうることができなかったためとおもわれる。今回のバルガ人の移動というテーマに関しても、残念ながら、ツェヴェルマーさんからきくことができた、直接やくにたつ情報はとくになかった。もっとも戦後のフルンボイルにおける民族教育や文学活動のはなしは、たいへん興味ぶかかった。ツェヴェルマーさんとの食事にくわわったオヨーンゴアという長身の女性文学者のはなしによると、最近、フルンボイル・ソム成立70周年のナーダムがひらかれ、自身をふくめ20数名の代表団がモンゴルを訪問してきたという。中国のフルンボイル市の新バルガ左旗とモンゴルのドルノド県のフルンボイル郡の交流の状況がかなりわかったのは収穫だった。

宿泊したアムガランのホテル、金腾飞暇日（Jintengfei Xiari）賓館のわたしの部屋に、よる、ポンツァグワンジルさん（1939年うまれ）がこられた。くりかえしになるが、前回もおめにかかっている。1988年から92年まで旗長をつとめた新バルガ左旗の有力者である。今回の調査でえられたもっとも重要な情報は、このポンツァグワンジルさんからもたらされたといってよい。

まず第1に、第二次大戦後、新バルガの住民のうち、満洲国の政府機関・軍に勤務していた100名ぐらいが日本の協力者としてモンゴル人民共和国につれていかれ、チョイバルサン市の洗毛工場などで重労働に従事させられたこと。これは、午前中のG.ドガルジャブさんのはなしの内容とも合致している。ソ連やモンゴルにおける日本人の抑留と共通の性格をもっており、同時に検討されるべき問題といえよう。

第2に、モンゴルに集団移住した旧鑲白旗のひとびとの特殊性。ポンツァグワンジル氏によれば、新バルガ左旗の最北部に位置する同地域は、鉄道がとおっていたため、世界のうごきにあかるかったこと、1940年代前半にジャンバル・ジャンギ事件で20名ちかくが逮捕・処刑されたこと、1900年にロシアとの戦争に動員されて死者がでたことなど、他の地域とことなる特徴があり、それらのことが戦後の移住に影響した。

ジャンバル・ジャンギ事件とは、1943年2月に満洲里の日本憲兵隊が新バルガ左旗の警察とともに、鑲白旗のソム長ジャンバル、チベット人活仏シャルガランザなど18名をソ連と関係があるという容疑で逮捕した事件で、一部の者は処刑され、一部は獄死したとい

う[3]。かれらがつねにソ連領にちかい場所で放牧していたことが、容疑をうける要因となった。

第3に、ハルハ河を国境とかんがえるみかた。清朝は最初、ハルハ河をフルンボイルとハルハのさかいにきめた、というバルガ人の理解がある。かつては、バルガ人はハルハ河の右岸で家畜をかっていたが、ハルハ人が河をこえてくることはまれだった。例外なのは、教訓書で有名なハルハの領主トグトフトゥルで、かれは右岸に陵墓をつくらせた。ポンツァグワンジルさん自身、うまれたのは、ハルハ河右岸のゴルバンサイハンだが、現在はモンゴル領になっていて、いくことができないという。国境に関するこのような解釈は、J̌a.デルゲルの回想にもでてくる。すなわち「当時、両国の国境はハルハ河で、河が境になっていたので、当地の牧畜民はハルハ河まで放牧していた。のちに、警備処が禁止したので、冬のゆきがおおいときのみ、家畜をつれていき、戦争のあとは、この広大な地域を完全にうしなってしまった」[4]。新バルガ左旗出身で、1910年代から1940年代までこの地域でつよい影響力を有したエルヘムバトの文章にも同様な解釈がでてくるので、この見方は同旗のひとびとによって共有されていて、その解釈を日本の関東軍が利用した可能性がある。

第4に、ノモンハン・ブルド・オボーの現在の状況。周知のように、ノモンハン事件という名称は、戦闘が最初、ノモンハン地区でおこったため、日本がわが命名した。ノモンハンは、「ノモンハン・ブルド・オボー」という地名の略だが、このオボーは、本来、祭祀用のオボーではなく、境界標識をたてた場所である。現在、この場所は中国領で、ふたつのオボーがたてられているということは、前回の調査で確認している。ブルドは池の意味で、池のちかくに、ふたつのオボーがあり、ひとつはノモンハン・ブルド・オボー、もうひとつはハリーン・オボー（*Qala-yin oboγ-a*）とよばれると、前回のノートに記録してある。*qala*（マンジュ語で*hala*）は他の地域では、オボグ（*oboγ*）とよばれ、「姓」を意味する。要するに特定の氏族がまつるオボーである。この氏族オボーはいまでも毎年まつられており、ことしも祭祀がおこなわれたということが、あらたにわかった。

10月に内モンゴル大学でハルハとフルンボイルの境界の問題にかかわる講義をしているときに、バルガ出身の学生に手をあげてもらったら、そのうちのひとりが、この氏族オボーはかなりあたらしく、1950年代前半につくられたと説明してくれた。当時ホーチン・バルガの一部のひとびとをこの地に移住させたことと関係があるという。

しかしǰa.デルゲルの回想によれば、ノモンハン・ブルドの西北方向に“ノモンハン・オ

---

[3] Bodongγud Abida, Či.Bod, “Qaγurmaγ Manǰu-yin Kingγan Qoyitu muǰi-yin bayiγulumǰi ba tegün-ü ǰarim bayidal,” *Kölön Buyir-un soyol teüke-yin materiyal*, IV, 1990, pp. 11-12.

[4] J̌a.Delger, “Nomun qan-u dayin-u tuqai,” *Sin-e Barγu J̌egün qosiγun-u soyol teüke-yin material*, Nigedüger, 1985?, p.49.

ボー”とよばれるふるいオボーがあり、このオボーを正藍旗の第1ソムのホルラード氏族がまつり、ナーダムをしていたという[5]。したがって、うえの学生の証言は混乱している可能性がつよい。

いずれにせよ、本来は境界オボーがあった場所に、あとで祭祀オボーがたてられたのであり、ノモンハン事件当時のノモンハン・ブルド・オボーを説明するときに、「祭祀」とのみ関連づけて説明するのでは、不十分である。さらにいえば、「ノモンハン・ブルド」は18世紀の前半以来、清朝作成の地図ではハルハとフルンボイルの哨所の所在地、あるいは境界とされており、バルガ人の伝承・言説はともかく、公式的には両地域の境界に相違ないのである。

8月6日（木）のあさは大青山飯店（モンゴル名は*Yekeayula qayulan ger*）という食堂でモンゴル式の朝食をとった。食堂の看板にキリル文字で*Их уул хоолон гэр*と併記してあるのは、新バルガ左旗とモンゴルのちかさをしめしていて、興味ぶかい。あさからゆでたヒツジ肉をたべる。食事のあと、文化大革命のまえにモンゴルに亡命し、国立図書館に勤務した、バルガについての著作もある、本旗（ホショー）出身のJ.ウルズィー（故人）のむすめのむすこというトゥムルバト氏が、旗の資料館を案内してくれた。モンゴルずもうの記念館（写真）も同時に見学した。バルガ人はすもうでつよいので有名である。

ガンジョール寺についたのは、午前11時ごろだ。前回訪問したときは再建中だったが、現在はもちろん完成している。午後、新バルガ右旗にむかう。前回は新バルガ左旗までしかいかなかったので、ここからさきはあたらしい経験である。ウルシュン河、ヘルレン河をわたり、右旗の行政の中心地アルタンエメールに到着。昼食は、セレンバト先生のモンゴル書道の弟子のモンゴル医学の診療所をやっている医師の招待で、韓国料理店にはいる。食事のあと、同旗のエウェンキ研究会会長のバザルさんが、バルガ博物館を案内してくれた。今回の調査では、セレンバトさんが自分の人脈を総動員して協力してくれた。

すもう記念館（アムガラン）

グベリ像（アルタンエメール）

[5] *Ibid*., p.48.

バザルさんは、新バルガ右旗出身の学者グベリ（Dalangγud Güberi, 1831-1890）を顕彰する活動をおこなっている。グベリはマンジュ語でバルガの歴史についての重要な著作をのこしたひとで、アルタンエメールの中心の広場に立像（写真）がたてられている。

フルン湖をへて、ロシアとの国境のまちマンジョウリ（満洲里）にむかう。その日のうちにハイラルにもどるのは、くるまを運転しているセレンバトさんの負担がおおきいということで、予定を変更してマンジョウリにとまることにした。ここでせわをしてくれたのも、セレンバト先生の書道のなかまで、税関に勤務するモンゴル人だった。夕食のあと、税関のゲートのまえまでいってみた。マンジョウリはいまや一日に数万の観光客があつまる大観光地で、とくにうつくしくライティングされた夜景は、なかなかのみものである。

8月7日（金）は、あさ6時に出発し、2時間強で旧（ホーチン）バルガ旗の中心地バヤンフレーにつき、旗の雑誌をだしている文芸協会の責任者の招待で朝食をとった。食事のあと、民族博物館を見学した。かなり充実した博物館で、バルガ、ソロン（エウェンキの一集団）、ブリヤートといった民族集団の民俗に関する資料を展示している。旧バルガ旗は、伝統的にシャマニズムがのこり、仏教の影響力がよわかったところで、現在もそのなごりがみられる。あたらしくたてられた仏教寺院に信者があつまらず、やむをえず、最近、たてものをハイラルにうつした。ハイラルにはいるてまえで、日本軍がきずいた要塞をもとにつくられた軍事博物館によった。

ハイラルでは、チョルモンさんの同級生や親せきなどがくわわり昼食をとった。昼食のあと、書店でバルガ関係の本を20冊ちかく購入し、郵便局から日本へおくった。著者から直接いただいた本や雑誌をふくめ、今回はまとまったかずの文献資料を入手できた。

このひはボイル大飯店にチェックイン。会議の会場としてもつかわれたので、結局4泊した。夕食は、北京の民族文学研究所のナチンさんの招待。同氏の内モンゴルの農村社会を研究した本が最近、賞をもらい、近刊のゲセル研究の本もたかい評価をうけている。

8月8日（土）は、旧（ホーチン）バルガ旗の東部のエウェンキ・ソムでチョクさんのお嬢さんの結婚式がおこなわれた。チョクさんは、最近の党の方針により、国会議員という立場上、ホテルで盛大な結婚式をやることはできず、今回はいなかにいるおばあさんを訪問するというかたちで、簡素な婚礼をエウェンキ式でおこなった。エウェンキ・ソムはハイラルから車で約2時間の距離にある。同行した国立民族学博物館の佐々木史郎氏によると、ロシアからうつってきたハムニガン・エウェンキのむらだそうだ。かれらは2回にわたって移動してきたが、最初は1930年代にやってきたという。むらにはいる一帯は湿地になっており、とてもうつくしい草原がひろがっている。途中、あめがふったが、式のまえにやみ、あおぞらがひろがった。式場にちかづくと、はなよめ（エウェンキ人）とはなむこ（漢人）はくるまからおり、馬車にのりかえ、草原をひとまわりした。老人たちがいすにすわると

式がはじまった。新郎、新婦が長老たちに馬乳酒をささげるのが、重要な儀式にかぞえられている。両親にも馬乳酒がささげられる。新郎と新婦のちちおやがそれぞれ、自分のむすこ、むすめの紹介をした。最後にはなよめ、はなむこがあいさつをし、そのあと、ゲルのなかで1時間半ほどうたげがつづいた。

エウェンキ式の婚礼

長老たちへのあいさつ

8月9日（日）の午後は、チョクさんのいもうとのカリナさん（中央民族大学）の案内で、エウェンキ民族自治旗のバヤンホショーをおとずれた。ハイラルからみなみへ約45キロの地点にある。途中、ダウル人のむら、ブリヤート人のむら（シネヘン）を通過する。佐々木さんが同行した。

わたしはオボーで有名なバヤンホショーを実は2002年にも訪問しており、オボーの写真をオラーンバータルで出版した自分の本の表紙につかっている。今回ももちろんオボーにのぼった（本号の表紙写真参照）。このオボーは、最近は中国人の愛唱歌「オボーでのであい」（漢語のタイトルは「敖包相会」［*Aobao Xianghui*］）の発祥地として観光化がすすんでいる。いまは大オボーの両がわに小オボーが6個ずつたてられ、いわゆる“13オボー”となっているが、カリナさんによると、以前はオボーはひとつのみであったし、くさのたけがいまよりずっとたかく60センチぐらいはあったという。かつてはくさがたかくおいしげっていたというはなしは、前回もきいた気がする。オボーのある丘のしたをイミン河が蛇行してながれ、すばらしい景観だ。このバヤンホショー・オボーをエウェンキ人もモンゴル人もともにまつっている。南屯（Nantun）のフフ寺やシネヘンの僧侶がオボーまつりにまねかれるという。

カリナさんの友人のエウェンキ人のお宅に招待される。この日のよるは、ハイラルのホテルでエウェンキ文化祭がひらかれ、エウェンキのうたとおどりが披露された。

8月10日（月）と11日（火）のふつか間、国際トゥングース学会が開催された。会議の案内には当初、アルタイ学会という表現もつかわれていて、実際はトゥングース研究とは関

係のないモンゴル研究の報告もすくなくなかった。わたしは、1日めの午前中に「古地図に反映されたハルハとバルガの境界紛争」という報告をおこなった。わたしの発表は、トゥングース系の代表的な言語であるマンジュ語で記録された18世紀、19世紀の2枚の地図を利用したので、会議の趣旨に十分あっているとおもう。

11日の午前中は『フルンボイル日報』(*Kölönbuyir-un edür-ün sonin*)の記者から“モンゴル研究の目的は？”などといった質問をうけた。同紙は、週5回、4ページで刊行されているモンゴル語の新聞だ。このインタビュー記事はネット上でもよむことができ、おおくのモンゴル人からそれをよんだときいたが、わたし自身はまだみていない。

8月11日のゆうがたの飛行機で北京にとび、そのひのうちに東京にかえりついた。

今回の調査は、いわゆるオーラルヒストリーを記録することに重点がおかれていたが、その目的はある程度、達成されたとおもっている。

## 付記

本稿は科学研究費補助金による課題「モンゴルにおける境界と越境の歴史」[課題番号15K02887、研究代表者　二木博史]による研究成果の一部である。